

ハルヒトヤはとある軍人家系に生まれた子供だった。

その家は現当主の正妻がなかなか子を作れないことで当主は焦っていた。そんな中、当主の妻がようやく成した子がハルヒトヤだった。

当初は喜ばれたものの出産してからひどく落胆された。生まれた赤ん坊が女の子だったからだ。

その家は代々当主の血筋を引いた男性が当主を務めることになっていた。戦争が始まりそんな緊迫した世間の空気を考えても、伝統からも女子を当主に据えることは考えられなかった。

出産後、当主の妻つまりハルヒトヤの母は体調を崩した上に年齢を考えるともう子供は作れない。ハルヒトヤはそんな母とともに冷遇されて育った。

親族のみならず使用人たちにも侮られる毎日だった。

父親は仕事を口実にほとんど家に帰らず、たまに帰ってきててもハルヒトヤには罵倒を浴びせるか無視することしかなかった。母親は毎日ハルヒトヤに暴力をふるい、泣いて恨み言を喚いた。

味方なんていなかった。心を許せる他人なんかいなかった。自分以外は全て敵だった。

それでも諦めきれなかった。

もっといい子にしていれば、ずっといい子にしていれば母も父もいつかは自分のことを見てくれるのではないか。

そう願うことが愚かだったことに気がついたのはハルヒトヤが13歳になった日のことだった。

今年も誰かに生きていることを祝われずに、肯定されるどころか否定されて、これまでのように何事もなく終わる誕生日のはずだった。

ある意味平穏な毎日が本格的に壊れ始めたのはこの時だ。

家に帰って来る時は不機嫌そうな顔をしている父親がこの日は満面の笑みで玄関の扉をくぐった。いつもは部屋に閉じ込められているハルヒトヤもこの日は母親とともに

玄関に呼び出されていた。ハルヒトヤは内心訝しく思ったが、普段より機嫌の良い父親に期待せずにはいられなかった。

もしかしたらこの前実技の成績が満点だったから褒めてもらえるのかもしれない。もしかしたら、もしかしたら……。想像は良い方向にばかり膨らんでいく。

密かに胸を高鳴らせているハルヒトヤには一目もくれないで父親はその場に集まった全員に向けてこう言った。

「この家の後継者が見つかったんだ。こっちに来て皆に挨拶をしなさい」

そう促されて父親の後ろから出てきたのはハルヒトヤとそう年が変わらないように見える少年だった。

「は、初めまして、カンギョウです」

場の空気が固まった。当然だ。誰もこんなこと予想だにしなかったのだから。

ハルヒトヤも硬直した。それが解けたのは母親が悲鳴を上げて座り込んでしまったからだ。

周りの使用人たちが慌てて駆け寄る。この場で動じていないのは父親だけだった。

ハルヒトヤも母親に駆け寄った。すると俯いていた母親の顔がこちらをぐるりと向く。隈に縁取られて血走った目はハルヒトヤを憎々しげに睨んでいた。そして、間髪入れずにハルヒトヤに掴み掛かり頬を叩いて罵声を浴びせる。

いつものことだからハルヒトヤは抵抗しなかったし、制止する者もまたいなかった。

父親は惨事を目の前に硬直している少年の頭をひと撫ですると連れ立って家の奥へと消えていった。

ハルヒトヤはその後数時間ほど嬲られ、疲れ果てた体を引きずって自室に戻った。

どこもかしこもズキズキと痛む。

何もする気になれず、質素なベッドに横になって天井を見上げる。思い出されるのは父親と少年のことだった。

聞けば少年は父親の妾の子供らしい。年齢はハルヒトヤのひとつ年下なのだと。今まで存在を知られていなかったが少年の母親が病気になったために父に名乗り出たのだそうだ。

なんだそれ、と思った。

男というだけであんなにも歓迎されるのかと。自分がいくら頑張っても手に入らない父親の優しさをいとも簡単に手に入れてみせて。

ずるい。ずるい。ずるい！

嫉妬の炎が胃の腑を焦がしている。どうしようもなく叫びたくなくて、しかしハルヒトヤは傷口に爪を立てて堪えた。

ハルヒトヤは少年の頭を優しく撫ぜた父親の手を真似るように右手を自分の頭に乘せてみた。長時間の折檻で冷え、毎日の訓練で固くなった自分の手のひら。父親の大きな手とは比べものにならないほど小さな手のひら。

視界がみるみるうちに歪んでいく。歯を食いしばって嗚咽を噛み潰した。

惨めだった。どうしようもなく惨めだった。

それからしばらく時がたち、少年、カンギョウは驚くほどの早さでこの家に馴染んでいた。

以前は家に寄り付かなかった父親も毎日のように家に帰ってきてはカンギョウと母親の3人で食卓を囲むことが多くなった。

母親も最初は自分と血の繋がらない少年に嫌悪感を示していたが、今では愛着が湧いているらしい。

ハルヒトヤは相変わらず除け者だった。両親はもうハルヒトヤに興味がないようで罵倒も暴力もふるわれなくなった。痛いことがなくなって嬉しいはずなのに頭の中は寂寥感と焦りでいっぱいだった。

どうにかして両親の目を自分に向けさせなければ。忘れられてしまう。今度こそ本当に捨てられてしまう。

ハルヒトヤは今まで折檻に取られていた時間を全て勉強や訓練に費やした。

いつものように早朝に起き出して、厨房に向かう。そして厨房の隅で隠れるようにして硬いパンと干し肉を齧る。

ハルヒトヤの食事はいつもパンと干し肉だ。戦場でも選り好みせずに食べられるようにするための教育だと教わっているが、そんなものは建前にすぎないことはハルヒトヤにも分かっていた。だって、カンギョウはいつ見ても湯気がたつ良い匂いのするものを食べていたから。

最後に温かいものを食べたのはいつだったか。それすら思い出せないほどハルヒトヤには縁がなかった。

いつ、どこで、何をしてもこの家には少年の存在がちらつく。その度にハルヒトヤの意識の端が嫉妬の炎に炙られた。

ハルヒトヤは速やかに食事を済ませると、足早に自室へと戻る。

午前中はカンギョウが庭で訓練をする時間なのでハルヒトヤは彼と顔を合わせないように自室にこもっていなければならなかった。

何もかもがカンギョウ優先で決められていく。

ハルヒトヤは悔しさに歯を食いしばりながら自室へと急いだ。

自室の扉に手をかけたハルヒトヤは部屋の中に誰かの気配があることに気が付いた。

誰だろうか。束の間、疑問に思ったものの、どうせ自分に八つ当たりにももしにきた使用人だろうと思い直した。

こう言ったことは初めてではなかった。時折、時間を問わずに自室に人がやってきて、ハルヒトヤで鬱憤を晴らすように部屋を荒らしたり暴力を振るっては帰っていく。

ハルヒトヤは心中でため息をつきながらノックをして扉を開いた。

「あ！おはよう！」

何をされても受け身を取れるよう警戒していたハルヒトヤはその明るい挨拶に目を見開いた。

部屋の中にいたのはカンギョウだった。

カンギョウはカーテンもかかっていない窓辺に寄りかかりこちらを見ていた。

差し込んだ朝日が彼の姿を照らしている。

予想だにしていなかった人物の登場にハルヒトヤは二の句が告げなかった。

なぜここにいるのか、どうやってこの部屋を知ったのか、疑問が湧いて止まらない。

扉を開けた姿勢のまま硬直したハルヒトヤに構うことなく、カンギョウは嬉しそうにこちらに近づいてきた。

「貴女と話したくてずっと探していたんだ！会えて嬉しいよ」

明確に自分に向かって話しかけている。それもとても友好的に。

「そ、それは光栄です」

機嫌を損ねないうちに何か返事をしなければと声を絞り出した。

ハルヒトヤの固い声にカンギョウは困ったように微笑む。

「貴女と僕は半分だけだけど血が繋がった兄弟だよ。そんな風に畏まらないで」

それに僕の方が弟なんだから、と続けられた言葉に血の気が引く。

この言葉を誰かに聞かれたら自分が折檻されるのは明白だ。この家の誰もがハルヒトヤのことをこの家の子供だと認めていないのだから。

「カンギョウ様が私の弟などとは恐れ多い。私のことは使用人と同じように扱っていただきたく」

目を伏せて告げる。自分を卑下するのには慣れていた。